361　乳癌におけるＣＡ１５－３測定の臨床的有用性　（第２報）

小森明美，山本英嗣（株ジェイ エム シー）
安住修三（京都第一赤十字病院外科）
児玉　宏（児玉乳腺クリニック）

前回我々は、乳癌におけるＣＡ１５－３測定の臨床的有用性について検討し、ＣＡ１５－３は乳癌の早期診断には有用性は少なく、癌の進展度の判定及び再発の予知において有用性が期待できると述べた。今回さらに症例を追加し、特に術後乳癌患者のＣＡ１５－３測定の有用性についてＣＥＡ，ＴＰＡも同時測定し検討を行った。

再発乳癌における陽性率は各マーカーとも原発乳癌に比し高率であった。経過観察し得た術後乳癌患者の寛解時と再発時を比較すると再発時でＣＡ１５－３の上昇が高率にみられ、ＣＡ１５－３値の上昇が臨床的再発確診前に先行したものもあり、再発の予知においてＣＡ１５－３測定が有用であると思われた。

又、再発部位別の陽性率、治療効果と各マーカーの変動についても検討し、その成績について発表する。

362　腫瘍マーカーとしての血中 CEA, CA19-9 および POA のコンビネーションアッセイとその臨床的評価

村上　稔、高松祐介、樽岡陽子、尾森春艶、西川彰治、立花敬三、石村順治、河中正裕、福地　稔（兵庫医大　核、RI）

現在、腫瘍マーカーの測定は、日常臨床上広く活用されている。しかし、多種多岐にわたる腫瘍マーカーの中で、単独測定のみでは、腫瘍マーカーとしての役目を果し得ない場合が少なくない。そこで、われわれは、腫瘍マーカーとしての血中 CEA, CA19-9 および POA につき単独およびコンビネーションアッセイを行うと共に、その臨床的意義につき評価を行った。

対象には診断が明らかな悪性疾患群 157 例を当て、同一血清試料につき、同時に血中 CEA 値、血中 CA19-9 値および血中 POA 値を測定した。その結果、悪性疾患群での各々の単独測定での平均陽性率は、CEA で 38.3％、CA19-9 で 43.6％、POA で 32.1％であったのに対し、コンビネーションアッセイによる平均陽性率は、CEA と CA19-9 で 61.0％, CEA と POA で 58.7％, CA19-9 と POA で 56.8％であった。さらに、CEA、CA19-9、および POA の３者のコンビネーションアッセイでは 71.0％と陽性率が上昇した。

363　モノクローナル抗体を用いたImmunoradiometric assayによる扁平上皮癌のスクリーニング
―― 従来法よりの改善を中心として ――

美濃直子，阿多まり子，石川元正，片岡正明，
木村良子，河村正，飯尾篤，浜本研，（愛媛大学
放射線科）

我々は、先にＳＣＣ抗原のモノクローナル抗体を用いたImmunoradiometric assay キットについて基礎的ならびに臨床的検討を行い、従来の二抗体法と比較して操作の簡便さや所要時間の短縮など技術面で改善されている事を報告した。更に実際に血清ＳＣＣ抗原を測定したところ、従来法と同様に各種臓器扁平上皮癌で高値となったのみならず、測定感度の向上により、低濃度領域での精度が大幅に改善していることも見い出した。そこで今回は、このあたらしいＳＣＣ抗原測定法が、従来法より臨床的にもスクリーニング検査法としてすぐれたものであるかどうかを調べるために子宮、皮膚、肺、食道、頭頸部の扁平上皮癌 181例を含む種々の疾患について、従来法と新しい方法で同時にＳＣＣ抗原値を測定し各々での陽性率を比較した。喉頭癌、舌癌などで２倍以上に陽性率が高くなったのをはじめ、他臓器の扁平上皮癌においても本法の方が陽性率が高くなり、スクリーニング検査法としては従来法に代わるすぐれた方法であることが判明した。

364　モノクローナル抗体を用いたSCC RIABEAD Kit の基礎的検討と臨床的評価－２抗体法との比較－

那須浩二[1]、羽渕洋子[1]、尾藤早苗[1]、半田文子[1]、
山口晴二[1]、才木康彦[1]、伊藤秀臣[1]、日野恵[1]、
池窪勝治[1]、大村文秀[2]、（神戸市立中央市民病院
核医学科[1]、同耳鼻咽喉科[2]）

SCC RIABEAD Kit （ダイナボット社）はモノクローナル抗体を用いたサンドイッチ RIAによる SCC抗原測定キットである。本法の基礎的検討と臨床的評価を行い、従来の２抗体法による SCC RIA Kit と比較検討したので報告する。

本法の intraおよび inter-assayのC.V.はそれぞれ 8.2%および 10.5%であった。平均回収率は100.1±4.4％（SD)で、希釈試験も良好であった。臨床的検討では健常者（63例）の SCCは平均 0.67 ± 0.27(SD)ng/ml で1.20 ng/ml（平均＋ 2SD）を cut off値とした。各種悪性疾患のSCC 値は主として扁平上皮癌で高値となり、治療により低下し、臨床経過をよく反映した。本法と２抗体法による血中 SCC値との間には良好な正相関が認められた。(N=186, r=0.95, y=1.10x + 0.99)

本法は２抗体法に比べ測定法が簡便で、精度、再現性ともに優れた。また、両法とも悪性腫瘍に特異性が高く臨床的に有用である。

Presented by Medical*Online